



# WE, JOKERS 英語のジョークを楽しむ会会報

No.16 October 10, 2009

- ジョークの心得三か条:
1. ジョークは心のゆとりであり、人生の潤滑油です。
  2. ジョークで言語の壁に挑むのは知的快感です。
  3. ジョークは簡潔が至上です。

## ジョークと私

## 笑いこそ人生本物の幸せ

草野 淳



僕がジョーク好きな人間になった原点は、若い頃のアメリカ暮らしのせいだと思う。

「使える英語とアメリカの社会感覚を身につけてこい」と、勤務先の新聞社から放り出された

25歳の僕は、2年間、英語ジョークの本場でもみくちやにされ、意識改造を強いられた。公私の場の区別なく、ギャグの連発と遠慮ない辛辣なからかいは、新鮮な衝撃だった。

挨拶やスピーチでも切り出しは、まずひと言ジョークからというアメリカの流儀は、肩ひじ張らないゆとり人間を思わせる魅力の文化だ、と僕は思う。

だから、「きょうは足もとの悪いところを…」

「高いところから失礼します…」と始める日本流のワンパターンを聞かされると、どうも居心地が悪い。

「dancing club に行かないかね」と誘われ、「ダンスは苦手だから」とことわっても強引に連れて行かれた先が『dancing crab』という店名のカニ料理レストランだった。そういうユーモア体質こそが、僕がアメリカに魅せられた理由の一つかもしれない。Kusano をさんざんに「クセイノ」と発音されたけれど。

そんなわけでジョークの“修羅場”をくぐってきたからか、ユーモアやギャグの醍醐味はなんといっても、実生活の中での絶妙なやりとりや当意即妙な言葉の切り返しにある、というのが僕のジョーク哲理である。創られた小ばなしの類

いには、だから、本当のところ心底からは、笑いの感動が僕には湧いてこないのだ。

それだからこそ、コラムニストのピート・ハミルがあるエッセイの中で、貧しかった時代ニューヨークの安アパートに同僚の記者達と同居していた日々を思い出し、「あの頃の我々は誰にも負けないほど笑って暮していた」と書いているのを見つけた時の僕は、人生本物の幸せを再発見したような気分になる。

コンピューターの数値が頭にいっぱい詰まっていそうなビル・ゲーツでも、インドを訪れたさいスピーチ前のマイクテストで「one, two, three,...」と発声するかわりに、「one billion, two billion,...」とやって、人口大国のインドとマイクロソフト社の巨額な対印投資をひっかけ聴衆を笑わせたそうだ。そんなこぼれ話に接するにつけても、アメリカン・ジョーク精神の健在ぶりがうれしくなる。

鋭い政治風刺とブラックユーモアで人気のあったアメリカの小説家 Kurt Vonnegut が、'07年4月、84歳で亡くなったあと、故人のウェブサイトを開くと、そこには黒と白のシンプルな線で描かれた鳥籠のスケッチだけがさりげなく浮き出たという。そしてその籠は、出入り口が大きく開け放たれ、籠の中は空っぽだった。周到に用意された辞世のメッセージだったのだ

ここまでくるともう、至高のユーモア美学、というほかに、駄洒落の域を出ない僕などは、ただただ脱帽するばかりだ。

\*\*\*\*\*

第 16 回研究発表会

Rakugo—Sit-down Comedy  
(英語落語) について

植田 良明

上方落語家の桂枝雀は、英会話を習いたくて英語で落語を始めたが、文京学院大学・外国語学部の准教授・大島希巳江が英語落語を海外に紹介するにいたった動機は、1996年国際ユーモア学会 (ISHS) に出席した際、日本人のユーモア・センスを問われたことによる。



確かに、日本人のイメージは「堅い雰囲気、外国人の前では自分の意見を言わない・英語で話すことに消極的・ユーモアのセンスがない」と言われている。

しかし、日本には江戸時代から約 300 年の歴史の中

で今に残るユーモア話芸、落語がある。この落語を英語で公演することによって、単に観客を笑わすだけでなく、日本のユーモア文化を海外に紹介することが出来ると考えた。

*Rakugo* can be best described as Japanese sit-down comedy or comic storytelling. Just as there is stand-up comedy in the west. Performers sit on a small mattress in front of an audience and act out stories with a comic style and structure. A performer plays the part of several characters in a single sketch. In *Rakugo*, only the conversations between characters appear in the story. Therefore, the performer must be able to play the role of each distinct character.

(以下略)

(大島希巳江著『世界を笑わせ！』から)

落語は、一人の演者が、老若男女・あらゆる階層・あらゆる局面を、座布団の上で演ずる芸であり、日本のように単一民族で構成される社会だからこそ、人々の同質性が高く、情報は広くメンバー間で共有され、言葉だけでなく、しぐさや視線でも伝える内容は理解される。

例えば、小指を立てるだけで多くの日本人はその意味を理解する。つまり聴取者の頭の中に語られたイメージが出来上がる。

しかし、たとえ落語が英語に訳されたとしても、日本になじみのない外国人にはなかなか理解しにくい。

例えば、「時うどん」(関東では「時そば」)のように、音を立ててうどんをすするなど、欧米では眉をひそめるような日本の食慣習は、事前に「日本ではうどんをすするのは失礼ではない。すするからうどんがおいしいのだ」ということを説明した。

また、嘸に出てくるうどん屋の屋号「あたり屋」は“Bingo”、「はづれ屋」を“Dongo”=Don't go (客はこれから博打場へゆくつもり)などと訳した。

——桂 あさ吉 「時うどん」を DVD で再生——

大島は、英語落語を演じる落語家たちのために、翻訳に際して難しい単語は避け、更にこれをカタカナにして原稿を作った。彼らはこれを単語でなくフレーズ単位で丸暗記した。彼らはストーリーが判っているので理解が早かった。彼らの日本的発音はあえて修正しなかったが、これが異文化圏の人々の好感をえた。

彼らが海外公演を続けるうちに、英会話を自然に憶え、いつしか一人歩き出来る様になった。

ところで「時うどん」海外公演後の感想は、「日本であんな事が出来るなんて、うらやましい！」「若し、日本に行ったら音をたてて、うどんを食べてみよう！」など好意的に日本の習慣を受け止めている。

◎笑いを媒介して、色々な国の人達と平和な関係づくり」を目指す。

## 初心者向け英語小咄の例

### 壺 算

A clever man went to a shop who sells a small pot for \$3.50 and a large pot for twice as much.

The clever man cut the price down to \$3.00 and brought the small pot.

After a while, he came back and said he wants the bigger pot.

He asked the store manager,

“The large pot costs twice as much, doesn’t it?”

“Yes,... you are good at shopping. OK, its \$6.00 for you.”

“Now, how much would you take this small pot back for?”

“Well, you just bought it a minute ago, I’ll take it back for \$3.00”

“Good, and you still have \$3.00 I gave you a minute ago?”

“Yes, it is still here, I have \$3.00”

“Then I give you the pot which is \$3.00, so the total is \$6.00”

“Ah, yes, sure it is.”

“Good, then I’ll take this large pot.”

“Thank you very much!”

(『世界を笑わせ!』より。ストーリーは大幅に短縮)

## ジョークのオチに正解はない

### 第2回ジョーク・コンテスト観戦記

#### 小澤 正樹

レストランでミシェル・オバマがウェイターに「sand paper をお願い」。5分後うやうやしく差し出されたサンドペーパーに、「違うわ! 私が欲しかったのは Sand paper よ」。

赤面しながらウェイターは、「何かまずいことしたかな?」(Joke Contest Supplement 作品番号15 参照。出題は上沼光紀会員)

これ、笑えますか?

コンテスト会場でもしばしの沈黙が続く。その時、服部さんの声が響いた。

「Sand paper という雑誌か新聞があつて、たしかミシェルは手記を連載していたはずだ。彼女はそれが欲しかったんだろう。

また、ミシエルの肌とサンドペーパーのどちらが黒いか、という悪質なトピックがネット上に広がり、自宅に大量のサンドペーパーが送られてきたこともこの話の背景にあるんだろう。

!!! 参加者は心底ジョークの深さと服部さんの博識ぶりに舌を巻いた。

さらにもう一つ。

Ted の友人は Ted のゴルフの腕はたいしたことなかったと言う。なぜって、“...he always ended up in the water hazard.” (作品番号13 参照。出題は長谷川真弓会員)

いつも池ポチャって、何が面白いんだ? 私は不愉快だぞ。笑えないジョークほど腹立たしいものはない。

ここで再び服部さん。「テッドとは先頃亡くなったテッド・ケネディだと気付かないと、このジョークはわかりません」。

なるほど。そうとわかれば water hazard とは、あの Chappaquiddick incident となり、このジョーク、何やら急にタイムリーかつ生々しいものに思えてくる。そういえば、彼もこの事件のおかげで、senator で end up したものだ。

実は15番のジョーク、“salt and pepper”の聞き間違いというのが元々のオチだと後のタネ明かしで判明。でも、服部説の方がどう見ても面白い。

ジョークのオチに正解はない。柔軟な頭脳と知識、そして高い(そして低い)アンテナが必要と痛感したジョーク・コンテストでした。

⇒練達のMC 相原悦夫会員



どうぞよろしく =新入会員ご紹介=

山崎 雍一 (東京都港区)

① 私にとってジョークとは：人間の愚かさに迫るものです。② 私のお気に入りジョーク：The judge came home and found his wife in bed with his very best friend. “Hey, what do you think you’re doing?” “See,” the wife said to the man beside her, “I told you he was stupid.”

PHOTOGENIC JOKES

■The Sad Crab of South Africa



This photograph shows a sad-looking crab found on a South African beach. It was submitted by Michael Power, Department of Pediatrics & Child Health, Red Cross Memorial Children’s Hospital, Rondebosch, South Africa.

■Happy Yeast



We announce the discovery of a new strain of a “happy” yeast.... This supports our theory that biology is the happiest science.

(*The Best of Annals of Improbable Researches*, Edited by Marc Abrahams, Published by W.H. Freeman and Company, New York, 1998)

第 17 回研究発表会のご案内

会員各位のご参加をお待ちします。まだ会員になっておられない方もどうぞ。

- 日時：11月21日(土) 午後2時-4時
- 会場：平河町 Mercury Room  
(クオリティ(株) 6階会議室)  
(東京都千代田区平河町 1-4-5 平和第一ビル)
- 交通：地下鉄・有楽町線麴町駅 1 番出口より徒歩 2 分。  
詳しくは、<http://www.quality.co.jp/> でどうぞ。
- 研究発表：  
「最近のリメリック」土屋政雄 会員  
「続 Stand-up Comedy の研究」花岡蔚 会員
- 参加費：会員・非会員とも 500 円。
- 研究発表会終了後、近くの喫茶店で交流会を開きます。こちらにも、どうぞご参加ください。
- 問合せ先：[renraku@eigojoker.com](mailto:renraku@eigojoker.com)



LET'S LAUGH WITH JAMES THURBER

- If you don't pay no mind to diseases, they will go away.
- Early to rise and early to bed makes a male healthy and wealthy and dead.
- It is better to be loafed and lost than never to have loafed at all.
- She developed a persistent troubled frown which gave her the impression of someone who is trying to repair a watch with his gloves on.

WE, JOKERS 英語のジョークを楽しむ会会報 16 号

発行日：2009 年 10 月 10 日

発行人：世話人代表 宮本倫好

編集人：佐川光徳

発行所：英語のジョークを楽しむ会

〒102-0093 東京都千代田区平河町 1-4-5 平和第一ビル

クオリティ株式会社 気付

TEL:03-5275-6121, FAX:03-5275-6130

問合せ先：[renraku@eigojoker.com](mailto:renraku@eigojoker.com)

